



蒲原宏先生が遺されたもの

亀田第一病院 新潟脊椎外科センター
長谷川 和宏

新潟大学整形外科学教室の初代・本島一郎教授（大正6年～昭和19年）から、現第7代・川島寛之教授（令和2年～）までのすべての教授と面晤し、教室の変遷を観てこられた、同門の最長老：蒲原宏先生（大正12年9月18日生）が令和7年3月3日、101歳の天寿を全うされた。医師であり、僧侶、医学史家、民俗学者、文筆家、そして俳人であられた蒲原先生の生涯は、とても紙面では表し得ない。整形外科の大先輩、そして俳句の師であった蒲原先生（俳号：ひろし）から教えて頂き、私の人生の支えになっていることを思い出すまさに記して、追悼の辞としたい。

蒲原宏先生は、新潟医科大学卒業後、昭和19年6月より海軍軍医学校において軍事医学訓練を受け、航空隊附軍医として太平洋戦争に実戦参加された。

今日よりは海の武夫菊日和（ひろし）もののふ

しかし、戦局は悪化の一途をたどり、沖縄戦に続くであろう本土決戦準備のために九州海軍航空隊、鹿児島県串良航空基地に編入された。上司の命令で、“元気が出る注射”ヒロポン（覚醒剤）を出撃前の兵士に打っていたという。昭和20年8月、広島、続いて長崎に原爆が投下され、8月15日正午、玉音放送を聞かれた。

国破れ旧山河あり盆の月（ひろし）

戦後80年を経過する今年初め、蒲原先生は「現代の世界の国家」という集団は原子爆弾を所有する事により本来の魔性を増幅し、対立して戦闘が継続され、人権が無視され無辜の犠牲者を日々増加

させている。」と語られ、自らも戦争に加担したことの大悔やんでおられた¹⁾。

戦後処理任務に従事した後、昭和21年に帰港、新潟大学整形外科学教室に復帰された。当時は、第2代・天児民和教授のもと、10人に満たない教室員が戦後の混乱期の中で奮闘していた。蒲原先生は、教室にとっても未曾有の困難な時期に入局されたわけである。天児教授は、「君たちは僕の門下生じゃないよ、君たちは僕の戦友だ」と話され²⁾、その言葉通りに教室員と共に働かれたという。天児先生が揮毫された「学ぶことは楽しいことだ、もし苦しいと思ふときは何かが狂っている」という色紙を、蒲原先生は最後まで大切にされていた。

ある日、体幹ギプス包帯治療の助手をしていたとき、天児教授が「西洋の整形外科の歴史は書かれているが、日本の整形外科の歴史は誰もわからない、誰か調べられるものがあれば良いが。」と呟かれた。この言葉が、蒲原先生のライフワーク・医学史の契機だった。蒲原先生の史実考証における姿勢は凄まじい。必要な資料があれば、世界中どこへでも赴き、自らの目と手で確かめられる徹底した実証主義である。その流儀で、埋もれていた多くの医学者の生涯を著された。特筆すべきは、雑誌『整形外科看護』創刊時から連載された『整形外科の歴史』である。人間の歴史の中で、整形外科がどのように生まれ、発展してきたかを、世界的な視野から俯瞰して詳細に記載したものである。第1回「文明の幕が開く頃」において「人類が癒しの知と術を求めて試行錯誤する数千年の歩みが始まった時代の整形外科的疾患について、先人の業績をたどり、この連載の幕を開けることとする」と連載を開始され、第301回（最終回）「20世紀初期から中後期へ」に至る26年間（1996年～

2021年)、急病で2回欠稿した以外は連載を続けられ、白寿で筆を擱かれた。天児教授が陔かれた希望を、自らの使命と受け止め、これを全うされたのである。

新潟大学医学部付属病院正面玄関前には、大いなるスズカケの木(学名プラタナス、*Platanus*)が亭々と立ち、毎日悩める患者を迎えていた(写真)。スズカケの木は街路樹としてよくみる落葉高木だが、正門の大樹は起源が異なる。医聖ヒポクラテス(紀元前460~370年頃)が、その木陰で講義したと伝えられているギリシャ・コス島の大プラタナス(*Platanus orientalis*)の末裔なのである(蒲原株第1号)³⁾。2,500年以上も前に、ヒポクラテスは「医術には、古来すべてがそなわっている。すなわち、原理も方法もわかっていて、発見はこれに従って行われるのであり、長い年月の間、立派に多くの発見がなされてきている。将来もまた、能力をそなえた人が、これまでの発見の知識に基づき、これを出発点として探求するならば、さらなる発見が行われ得るのである」⁴⁾、と講義し、医師として守るべき誓を立てた。その医聖を見守った大樹の末裔が、今、我らが大学付属病院に木陰を作っているのである。昭和44年、蒲原先生はライデン大学(オランダ)で開催された「日蘭文化交流シンポジウム」で講演され、その帰路、コス島を訪れた。しばらく医聖の大樹の前に佇み、「医聖醫を講ぜし島の大夏木」と謳われ、その球状果3個を持ち帰られた。球状果は新保只衛農学博士(龜田)によって播種・実生し、その9株と挿し木を加えた30本以上のヒポクラテスの木が日本各地の大学や病院で爽やかな葉を広げている。弊院正面玄関にも蒲原株(第8号の2)がすくすくと育っている。春先から元気に新芽を出し、夏にはあっという間に青葉を繁らせて涼しい木蔭を作り、晩秋には黄葉し、少しづつ散っていく。この営みを毎年繰り返し、多くの患者と医師の人生を見守ってきたのである。

植樹して五十有年医聖の木(ひろし)

新潟の近代俳句を少し顧みる。近代俳句の創建者、高浜虚子の門下であられた中田みづほ(本名:瑞穂 新潟大学脳外科教授)と濱口今夜(本名:



一郎 同 内科教授)が中心となって、昭和4年に俳誌「まはぎ」を発刊し、続いて、昭和7年には虚子の高弟・高野素十(本名:興巳 同 法医学教授)が加わったことで、新潟に「客観写生」を宗とする一大俳句道場ができあがった。蒲原先生は、学生時代から、この道場で鍛錬し、生涯に13冊の句集、評論、評伝など多数の俳句関連著作を出版された。中でも御年89歳において、主宰されていた俳誌『雪』(昭和52年創刊~令和5年終刊)への連載を開始、95歳で終稿とされるまでの内容をまとめた『畠打って俳諧国を拓くべし~佐藤念腹評伝~』⁵⁾は、畢生の大著である。越後笛神村に生まれた佐藤謙二郎(俳号:念腹、1898年~1979年)が、昭和という日本史の大激動時代に、地球の裏側(ブラジル)に渡り、苦難に打ちひしがれながら原生林を切り開き、家族を養い、同胞を育み、異国に俳句の世界を打ち立てた。その一人の叙事詩である。蒲原先生に本書を執筆せしめる動機となったのは、38歳の壮年期における念腹との生涯一度の出会いにあったと思われる。その一期一会の根底には、虚子先師より続く「客観写生」「花鳥諷詠」の信念が脈々と流れていたと考える。

精力的に活動を続けてこられた蒲原先生であるが、令和2年12月、以前から患っていた腰椎分離すべり症・腰部脊柱管狭窄症が悪化し、両下肢ほぼ完全麻痺、尿閉の状態で弊院に緊急入院された。DM性腎機能障害、慢性心不全などのため、

全麻手術は困難で、腰椎麻酔下に腰椎神経除圧手術を施行した。

麻痺の足動き始めしクリスマス（ひろし）

懸命なりハビリによって、つかまり立位・歩行可能となり、翌年3月15日退院。その後も心機能低下のたびに入院治療され、そして、復活を繰り返された。この間も、執筆活動や俳句指導を継続されたことはいうまでもない。しかし、令和7年1月6日に入院されてからは回復が思わしくなく、3月3日、夕刻から心拍数が低下し、呼吸状態も徐々に悪化し、午後7時58分 御家族に見守られながら永眠された。

人は、世に生まれ出たときが旅立ちであり、旅の途中で、さまざまな風物に接し、人々と出会い。あらゆる出会いによって生きることを学び、生きることの意味を知る。そして、終には、旅から戻つて生を閉じる。蒲原先生によると、紀元前3世紀頃に作られたといわれるアイ・ハヌム（アフガニスタン北部のギリシャ人による古代都市）の碑文には、人間というものは『幼年時代には正しい作法を学ばねばならない、青年時代には感情を抑えることを学ばねばならない、中年になったら正義であることを学ばねばならない、老年になったら良き助言者となり、こころ静かに世を去れ』とい

う意味の言葉が書かれているという。最期まで手にしていた句帳には、「山眠る如く一期を終わりたし」という句が繰り返し書かれていた。蒲原宏先生は、アイ・ハヌムの碑文どおりに、比類なき生涯を全うされたのである。

泉下の蒲原先生は、「やがて大夏木になれと植ゑらるゝ」と師・中田瑞穂教授が詠んだヒポクラテスの木蔭で、先師たちとの尽きない語らいを楽しんでおられると思う。

山笑う如く一期を終へられし 合掌

（新潟大学医学部整形外科学教室同窓会誌2025 No. 73より転載）

文献

- 1) 蒲原宏（ひろし）：句集『愚戦の傷痕』。 （株）大創、新潟県、2022.
- 2) 林道雄：無常迅速 天児民和. 西日本新聞社、福岡県、1980.
- 3) 星栄一：ヒポクラテスの木と蒲原株. 厚生連医誌 2007；16：163-169.
- 4) 小川政恭（訳）：ヒポクラテス 古い医術について. 第一刷、岩波書店、東京都、1963.
- 5) 蒲原宏（ひろし）：『畑打って俳諧国を拓くべし－佐藤念腹評伝－』。 （株）大創、新潟県、2020.